

SBIグループがセキュアなオンプレミス型のOpenStackクラウドによりインフラ自動化を推進

SBIグループについて

- 日本の大手金融サービス企業グループ。
- 本社所在地は東京、グループ企業は250社以上にわたり、6,000人を超える従業員を擁す。
- SBIグループの企業は、インターネットバンキング、保険、証券仲介、アセットマネジメントなど、多岐にわたる金融サービスを提供する。

ハイライト

- SBI BITSは、OpenStackデプロイの設計、実装、およびサポートをCanonicalに委託。
- Canonicalは、競合他社が提案した3分の1の価格でOpenStackを提供。
- 超集約型アーキテクチャおよびフルスタックサポートにより、SBI BITS全体の設備投資(CAPEX)と運用コスト(OPEX)の両方の節約を実現。



概要

SBI BITSは、SBIグループの企業および関係会社にITサービスとインフラを提供している。大きな需要があるなか、SBI BITSはクライアント要件を満たし、市場投入までの時間を早めることのできるベアメタルサーバーに代わるソリューションを求めている。

グループ全体にサービスとリソースをより迅速に提供する方法を模索する中、SBI BITSは複数のソリューションを検討し、最終的にOpenStackを採用した。専門性、価値、そしてオープンソースの柔軟性を併せ持つCanonicalは、OpenStack技術の導入およびサポートにおいて理想の選択であった。すでにSBI BITSはOpenStackによりこれまでにない自動化とコスト削減を実現しており、今後この技術をSBIグループ全体に展開する構えだ。

課題：

数百社に及ぶ関係会社がSBIグループのフィンテック部門であるSBI BITSのITサービスに依存している。そのため、SBI BITSはごく短期間での市場投入を求める数多くのグループ内クライアントに同時にインフラ提供するために、大きなプレッシャーを受けている。

「当グループのITニーズはますます高まっており、コンピュート、ストレージ、およびネットワークリソースの迅速なプロビジョニングが課題となっていました。大規模なハードウェアリソースを運用することでなんとか需要に応えてきましたが、デプロイが自動化されていないなかで厳しい納期を守ることは、時として大きなストレスでした」とSBI BITS社のCIOであるGeorgi Georgiev氏は述べている。

「CanonicalのOpenStackにはロックインのリスクがありません。アップストリームバージョンに近いため、こちらが望めばサポートの完全な内製化も可能です。」

SBI BITS社CIO、Georgi Georgiev氏



当時、SBI BITSは従来の仮想化技術を使用していた。しかし、インフラ提供を真に効率化し、自動化されたオンデマンドのリソースプロビジョニングを実現するには、いずれクラウドコンピューティングへ移行しなければならないことに気づいていた。

「パブリッククラウドは選択肢にありませんでした」とGeorgiev氏は続ける。「規制の厳しい金融サービス産業で事業を行うには自社のデータを完全に制御する必要があります。インフラがオンプレミス型でなければ法規制への対応はより複雑になります。」

そこでOpenStackが完璧なソリューションとして現れた。OpenStackによりSBI BITSは自社のハードウェアに独自のプライベートクラウドを構築し、自社のデータを第三者へ委託することなくクラウドコンピューティングの利点をすべて手にすることができたのだ。

Georgiev氏はさらに次のように述べている。「OpenStackの自社運用も試しましたが、本稼働には専門家のサポートが必要でした」と。

解決策：

SBI BITSは当初、既存の技術提携先に依頼したものの、提案されたOpenStackのデプロイとサポートのコストは非常に高額であった。また、仮に彼らのソリューションを採用していたら、ベンダーロックイン（依存）に陥っていただろう。対照的にCanonicalの提案は費用対効果が高く、柔軟性があり、SBI BITSのオープンソース哲学に合致するものであった。

「Canonicalのソリューションは、他社の提案価格のわずか3分の1でした」とGeorgiev氏は回想する。「コストの問題だけではなく、Canonicalとは当社で直接話し合うことで、OpenStackデプロイのサポートに関してCanonicalへの信頼を深めることができました。Canonicalが確かな知識を持っていることが理解できたのです。」

「加えて、ロックインのリスクもありません。CanonicalのOpenStackはアップストリームバージョンに近いため、当社は適時最新の更新を取得することができます。すべて社内でサポートを行うという自由もあります。必ずしも当社がそう希望しているわけではありませんが、選択肢があることは重要です。多くのオープンソース技術を社内で使用しているため、オープンでアップストリームに近いというCanonicalの企業文化は非常に魅力的でした。」

SBI BITSは、OpenStackのデプロイが完了するとKubernetesに興味を示した。しかし社内にはKubernetesを管理するための正しい専門知識がなかったため、CanonicalはOpenStackとともにKubernetesのサポートをバンドルすることを提案した。

Canonicalは最初のOpenStackデプロイの設計と構築を数週間で完了し、現在はUbuntu Advantage for Infrastructureのエンタープライズサポートパッケージを介して継続的な保守を提供している。2サイトそれぞれ73個のノードで構成される初期の実装は、超集約型インフラとしてデプロイされUbuntu 18.04を稼働している。このアーキテクチャは、ソフトウェア定義型アプローチを可能にし、自動化およびリソース活用を飛躍的に向上させることで、大幅なコスト削減効果を生み出すのである。

さらに、CanonicalはCephを使用することにより各サイトに300TBの最適化されたストレージを提供する。Cephとは、オブジェクト、ブロック、およびファイルストレージが1つの無停止型システムとして組み込んだオープンソースの分散型ストレージプラットフォームである。多様なデータアクセスメソッドを用いるSBIのような企業には理想的なストレージプラットフォームである。

SBI BITSはCanonicalのJujuとMAASツールも活用している。MAASは、企業のベアメタルサーバー用に自動化されたセルフサービスのプロビジョニングを可能にする。Jujuは複雑なソフトウェアのデプロイ、構成、および運用を効率化するアプリケーションモデリングツールとして機能するものである。

CanonicalのOpenStackデプロイに要する時間はわずか数週間

自動化により、リソースのプロビジョニングに関する物理的作業の大半が不要に

オンプレミスソリューションにより法規制対応が容易に

結果：

SBI BITSは、最初のOpenStackデプロイからすでにさまざまな恩恵を享受している。何より、プライベートクラウドによってインフラの提供が効率化され、SBIグループのITニーズにストレスなく対応できるようになったのである。

「今ではOpenStackによってすべてに対応できます」とGeorgiev氏は言う。「過去には、ケーブル配線など面倒で時間のかかる物理的作業に悩まされていました。しかし今では、ほとんどの作業が設定作業になり、短時間で完了するようになりました。既存のデータセンターのシステムに統合する必要のないデプロイの場合、社内で物理的に行うことは一切ありません。」

このソリューションは、設備投資と運用コストの両方の観点でも高い費用対効果を生み出している。OpenStackはハードウェアをより効率的に使用しているため、この先行投資は非常に理に適っている。同時に、Ubuntu Advantage for Infrastructureは、保守とトラブルシューティングにおける複雑さをすべて解消し、結果として運用コストを削減、社内チームはコアビジネスに集中できることになるのである。

「しかも、当社は今までどおり自社の環境全体を制御できています」とGeorgiev氏は付け加える。「規制当局へも、当社のすべてのデータが社内ですべてホストされていると説明することで、大方の懸念は払拭されます。」

OpenStackは今後、SBIグループ全体で使用されるようになる。その次のステップは、CanonicalのサポートによるKubernetesの導入だ。SBI BITSは、グループ全体にKubernetesをマネージドサービスとして提供することを予定している。

「Canonicalとのこれまでの取り組み全体が素晴らしい経験です」とGeorgiev氏は述べる。「Canonicalのソリューションのおかげで当社は安定した自動化環境を持つことができ、リソースのプロビジョニングはもはや面倒なプロセスではなくなりました。」

OpenStackの詳細については、こちらをクリックしてください。

<https://jp.ubuntu.com/openstack>

お問い合わせ

<https://jp.ubuntu.com/contact-us>